

名作の舞台から

フェルメールが見つめた17世紀のデルフト

Consultant 会誌編集専門委員会



写真1 - フェルメール作「デルフトの眺望」(マウリッツハイス美術館所蔵)

都市を描いた風景の名作、といったら何をいってもフェルメールの「デルフトの眺望」が思い浮かぶに違いない。「名作の舞台から」の第一回は、その舞台となった「黄金の世紀」と呼ばれた17世紀オランダのデルフトを取り上げる。

ヨハネス・フェルメール(1632~1675)は、レンブラントとともにオランダが世界に誇る画家である。オランダ西部の町、デルフトに生まれたフェルメールは17世紀のデルフトで育ち、そして生涯を過ごした。フェルメールの絵にはごく普通の人々を主題とするものが多い。「デルフトの眺望」は2点しか残されていない風景画のひとつである。

16世紀末、東方貿易に目をつけた商人や資本家が次々に船をだして競争が激化したことをうけ、1602年に統一東インド会社(頭文字からVOCと呼ばれる)が設立された。日本ではちょうど江戸開府のころにあたる。東方貿易は大きな富をオランダにもたらした。黄金の世紀の始まりである。デルフトにも東インド会社の6つの支部の一つが置かれ、出航する船への補給貨物の製造などによって都市が発展していく。

「デルフトの眺望」が描かれたのは1660年頃である。この絵が描かれた場所は、デルフト市の中心部の南、コルク運河と呼ばれるあたりといわれる。ここにはロッテルダム門とシーダム門という2つの市壁の門があり、



写真2 - 17世紀のデルフト古地図。Aが「眺望」が書かれたと思われる地点、Bが東門のある場所 Cが新教会、Dが旧教会



写真3 - 東門の対岸からの眺望 「デルフトの眺望」とよく似た景色だが、本当は別物(B地点)



写真4 - 「眺望」が描かれた地点の風景 絵にあった2つの門は壊されて今はない(A地点)

これが「デルフトの眺望」の近景に描かれている。左のシーダム門には時計台があり、時刻は7時35分ほどを指している。門の手前は運河の水面は朝空の晴れ間と黒い雲の陰を微妙に映して、いいがたい光と陰のタペストリーを見せている。南から北を眺望しているから朝日は右から照らし、遠景の新教会の右半分が朝日を受けて光っている。画面左には旧教会の尖塔の先がかるうじて見えている。

デルフトの中心は、市役所と新教会が両端で対峙するマルクトと呼ばれる広場である。フェルメールはこのマルクト近くのロウハウスで生まれた。広場に面する建物の大半は17世紀に建築されたものだ。ヨーロッパの石の都市は、日本の木と紙の都市に比べてよく残る。新教会も旧教会も17世紀と同じように立っている。

残念ながら「眺望」に描かれた2つの門は19世紀に撤去されてしまい、今の景色は「眺望」とは似ても似つかない(写真4)。そこから1キロほど東にはロッテルダム門とよく似た「東門」が残されている(写真3)。角度を選ぶと2本の小塔をもつ東門と新教会がまるで「眺望」と同じように見える。デルフトの眺望を楽しむにはここが一番かもしれない。

(文章 山田耕治)



写真5 - 新教会とマルクト(広場) 左の黄色い大きなひさしの家はフェルメールの絵画を収集したデンウスという画家の家



写真6 - 旧教会は運河に沿って立つ 少し内側に傾いたがそのまま建築を続けたそうだが「眺望」では突端だけが画面左にすこしだけ見える

(写真: 4、倉田雅人 写真3、5、6、7、8、山田耕治)
(参考文献)
M.P. van Maarseveen, Vermeer of Delft - his life and times, 1996
星野知子、フェルメールとオランダの旅、小学館、2000年



写真7 - 旧教会にあるフェルメールの墓標 バラの輪がさりげなくおかれていた



写真8 - オランダ東インド会社のデルフト支部の建物 VOCの文字が見える